パフォーマンスとそれが実践される場の関係性

―トルコ・都市におけるアレヴィーのセマーを例として―

総合研究大学院大学
（国立民族学博物館） 米山 知子

本発表の目的は，トルコ共和国のアレヴィーAlevisと呼ばれる人々が本来儀礼の中で実践してきたセマーSemahと，1950年代以降のトルコ社会の変化によって多様化するセマー実践の「場」に焦点を当て，パフォーマンスとそれが実践される「場」の関係性を人類学的視点から明らかにすることである。

現在一般に芸能と認識される身体技法は，本来宗教的なコンテクストで実践されてきたものが多く，そのような身体技法は，実践のコンテクストが変化するにつれて，派手な装飾が施されたり，新たな意味が付与されたりし，また，その結果本来持っていた意味が大きく変化することがある。本発表の対象であるトルコのアレヴィーのセマーは，そのような身体技法の一つとなっている。

アレヴィーとは文字通りには，イマーム（導師）・アリーを信奉する人々という意味である。トルコのアレヴィーは，その長い歴史の間独自の文化を育んできたが，宗教実践の差異を理由に，多数派であるイスラーム教スンニー派の人々からは異端視されてきた。異端とされる理由を具体的に挙げてみると，男女一緒に行う儀礼ジェムや，ジェムの構成要素の一つで，神と合一となることのできる唯一の手段とされるセマーである。セマーは儀礼ジェム以外の場で実践されることは許されてこなかったという。

しかし，1950年代以降のトルコ社会の変化，特にトルコの都市化を契機に，セマー実践のあり方に変化がみられるようになった。都市の産業化や農業の機械化によって，農業に従事していた地方住民の多くがイスタンブルなどの大都市へ職を求めて移住した。移住先では簡易住居を作り，出身地域ごとに，相互扶助や地元文化の普及・保存を目的とした協会を組織した。アレヴィーはそのような同郷者組織とは別に，1960年代頃から文化協会dernekを設立し，相互扶助だけでなくアレヴィーの聖者の廟を中心に，廟や聖者の残した文化の修復・保存を行ってきた。アレヴィー文化協会では様々な文化活動が行われるが，セマーを享受することを目的としたセマー教室は，その中心となっている。

このようにして本来の実践の場である儀礼から抜け出したセマーは，アレヴィーの諸権利を主張する人々によって，次第に「アレヴィー文化の象徴」として用いられるようになり，新たなセマーというものが出来上がっている。現在セマーは，公演や映像作品（VCD），更には個人（結婚式など）で実践する者も現れ，様々な場でみられるようになった。しかし担い手たちは，どのような場で実践しようとも，セマーは「舞踊・芸能」ではなく「信仰心の表れ・神への愛」であるという。この「矛盾」に折り合いをつけるために，担い手たちは当該社会に適した幾つもの仕掛けを，実践の「場」に施しているのである。

本発表では，以上の文化的歴史的背景を持つトルコ都市在住のアレヴィーが実践するセマー（パフォーマンス）を例として，新しいパフォーマンスが担い手によって当該社会（場）に位置づけられる過程を検討し，パフォーマンスとそれが実践される「場」の関係性を明らかにする。本発表におけるセマー（パフォーマンス）が実践される「場」とは，従来のパフォーマンスに関する人類学的研究を検討した結果，様々な要素が時間と共に構成される「空間space」，イスタンブルなど「地理的場所place」，「コンテクストcontext」という3つの意味内容を持つ。特に「コンテクスト」は場の生成原理にも強い影響を与えるため，特に重要視する。

また本発表においては，セマー実践の場を便宜的に1. 儀礼，2. セマー教室，3. 公演，4.「商品」としてのセマー（新たなる実践の場），5. 個人，の5つに分類し，分析を進めていく。